

日本では遅れていた ロシア研究を進めるのに 貢献できたと思います。



文化創造学部教授 皆川修吾

【学歴・職歴】

1961年3月 早稲田大学法学部卒業
1963年6月 ドイツ ミュンヘン大学経済学部中退
1965年6月 オランダ ハーグ国際司法裁判所 国際法アカデミー修士課程修了
1968年6月 イギリス ウェールズ大学国際政治学部修士課程修了
1973年1月 オーストラリア国立大学院社会科学研究所
ロシア政治学専攻博士課程単位取得満期退学
1975年9月 オーストラリア国立大学 博士(政治学)学位取得

【職歴】

1973年2月 オーストラリア国立大学教養学部政治学科兼任講師
1977年4月 南山大学法学部助教授(のちに教授)
1988年4月 南山大学オーストラリア研究センター長併任
1990年4月 北海道大学スラブ研究センター教授(のちにセンター長)
1999年6月 文部省COE海外派遣研究員・オックスフォード大学セントアントニーズ大学院コレッジで研究教育活動
北海道大学名誉教授
2000年4月 愛知淑徳大学文化創造学部教授
2001年4月 愛知淑徳大学大学院
2008年4月 グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科長



【皆川先生の主要論文リスト】 ○単著 □論文
○「ロシア連邦議会一制度化の検証:1994-2001」深水社 2002
□「Managed Parliamentary Democracy in Russia」愛知淑徳大学論集(文化創造学部編 第4号)2004
□「Parliamentary Democracy in Russia at a Crossroads」北海道大学スラブ研究センター 夏期国際シンポジウム報告集 2004
□「Towards Global Standard:The Impact of Globalization on Japanese Culture At Political and Societal Levels」愛知淑徳大学論集(文化創造学部編 第5号)2005

皆川先生は海外渡航がまだ難しかった1960年代初頭、留学したい一念で、難関だった資格とパスポートを取得。私費留学生としてドイツへ渡りました。ドイツで経済学、オランダではカーネギー財団から奨学金を得て国際法、そしてイギリスで国際政治学と、ヨーロッパ研究を続けて修士号を取得。オーストラリア国立大学に招かれて、ロシア政治学を研究します。その成果が評価され、日本が初めて重点領域研究として3億円超もの助成金を出した北大での「ロシア研究」の責任者として就任。ロシアからは、元ソ連のゴルバチョフ大統領からサイン入りの手紙をもらうほど信頼も厚く、3年間で延べ3000人以上の専門家が参加した報告書を完成させます。「日本でのロシア研究を盛り上げるのに、多少は貢献したと思います」。現在も日本でのロシア研究の第一人者として、新たなテーマ「ロシアの議会政治」に取り組みられています。

私の専門はロシア研究です。ロシア帝政時代を経て、1917年ロシア革命があり、その後75年間のソヴィエト政権を経て、1992年新生ロシア連邦が誕生しました。ロシアは封建主義、全体主義、自由主義体制という体制転換を経験した国です。ロシアは地政学的にも東西の狭間に存在し、複雑な民族構成からも西欧とも非西欧とも言い難く、西欧諸国の近代化をもとに構築された近代化論ではとても理解できる国ではありません。ロシアが体験した国内外の価値体系の連続性、不連続性、断続性に注目し、国際社会でのロシアの自存と共存の視点からこれまでのロシア国家の文明的意味付けにチャレンジし、今後ロシア国家の行方に関心をもっています。

ロシアに関心をもっている方々は恐らくつぎのような質問に対する答えを模索することでしょう。

1. ロシアはアジアかヨーロッパか、
2. ユーラシアとはどこを指すのか、
3. なぜ文明史の実態があるのか、
4. ロシア帝政はブルジョア社会に移行することが出来なかったのか、
5. 冷戦構造崩壊後のロシアはどのような歩みが続いているのか、
6. なぜ隣国ロシアは遠く感じるのか。

日本における文学・哲学分野でのロシア研究は明治時代に始まり、内容も充実したものでした。戦前、知識人と称する人たちの多くがロシア文学・哲学の洗礼を受け、なんらかの形で広く日本社会に影響を与えていたのも事実でしょう。戦後の日本におけるロシア研究は、冷戦の影響下で、ほとんど忘れ去られた遺物的存在でした。それが、1991年冷戦構造崩壊後、それまでのあらゆる分野におけるロシア研究の遅れ(欧米諸国に比べ)を取り戻すべく、日本政府は重点的に研究予算を配分しております(1995・1997年度重点領域研究111、領域代表者皆川)。その結果、やっとロシア研究も目の目を見て、上記のような質問に答えるべく、研究環境が整って来たといえます。